

中世文学〔美術〕史用語の生成・定着と内国勸業博覧会

——奈良絵本をめぐる——

牧 野 和 夫

はじめに

〔国文学会〕における奈良絵本・絵巻という學術用語（語彙）の定着には、当初よりいささかの「揺らぎ」があった（そして、いまもある）。その間の経緯は、既に「居初氏女はつ」の紹介に手習い師匠としての事績をも挙げた清水泰氏「奈良絵本考」（一九五三年）に指摘されてはば明らかにされたが、學術用語として生成するに至る「動き」については、詳らかではない。「奈良絵本」という「ことば」の定着の背景とその周辺」（『実践国文学』七一号）と題した一篇を記したのも、その解明を期したからである。そこでは、明治三十七、八年の『集古会』などの趣味家の世界で、奈良扇の図案化が始まり、集古会誌所収仮名草紙関連論文

に用語「奈良絵本・絵巻」を採用した一篇が登場することを紹介した。山中共古などが新しい「〔絵〕葉書」というメディアに奈良〔絵〕扇風の彩色図案を活用したこと、更に江戸以来の千社札に新味を求めた東京の「諸国物産」絵札交換会において、奈良扇が一刀彫の鹿と共に図案化され奈良の特産とされていること、明治三十五年創刊の情歌雑誌『奈良扇』創刊号表紙（発行元奈良市内）で、奈良扇が図案化されたこと等を指摘した。直後に判明した『文藝倶楽部』定期増刊「京都と奈良」八巻六号（明治三十五年）は紙面構成から見て第四回内国勸業博覧会と一九〇三年開催の第五回内国勸業博覧会に緊密に係わるものであり、集古会と親しい歌川国松画く奈良絵風扇を京扇の下に「利かせた」意匠で際立つ表紙は奈良扇の格上げ・特産品化とい

う産業振興とも結ぶもの、と推測し、奈良絵本・絵巻国際会議神奈川大会（二〇一二年八月八日於慶應義塾大学日吉校舎）・大正イマジユリー学会大会（二〇一三年三月一〇日於國學院大學）において、各々「京都『日出新聞』と博文館蔵谷小波」・「第四・五内国勸業博覧会と奈良絵扇・奈良絵本」と副題を設け口頭発表を行った。本稿はその発表内容に若干の増補を行い活字化したものである。

一、『文藝倶楽部』定期増刊「京都と奈良」について

『文藝倶楽部』定期増刊「京都と奈良」八巻六号（明治三十五年）は紙面構成（巻尾に添へ）た「関西旅行の栞」には各地の名勝・路線案内、乗車時間や料金などを収め、「旅行者の心得」まである）から見て翌年の大阪四天王寺にて明治三十六年（一九〇三）開催の第五回内国勸業博覧会に緊密に係わるもので、一種の観光ガイドブックと見做しても誤らない。明治三十五年四月『文藝倶

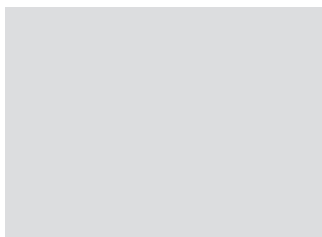
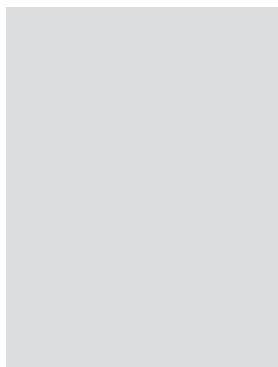
楽部』は「東京」引き続き「大阪と神戸」「伊勢と名古屋」と刊行されたことも大阪開催の内国勸業博覧会を軸にした観光ガイドブックの性格の強い一冊であることを示している。その表紙は次のようなものである。

「奈良絵本」という「ことば」の定着の背景とその周辺」（『実践国文学』七一号）において指摘した明治三十七、八年の『集古会』などの趣味家の世界で、奈良扇風画の図案化が俄かに盛行をみた背景に、『文藝倶楽部』定期増刊「京都と奈良」八巻六号（明治三十五年）の表紙下段を飾った、この奈良絵扇の「存在」（集古会々員の巖谷小波・水谷不倒他を軸とした、その経緯

をも含む)があった、と考えられる。集古会の古参有力会員山中共古などが新しい「(絵)葉書」というメディアに奈良(絵)扇風の彩色図案を活用したことで深い繋がりをも認めてもよく、千社札に新味を求めた東京における「諸国物産」絵札交換会において相似た図案の「奈良扇」が一刀彫の鹿と共に奈良の特産とされていることも無縁ではない。『文藝倶楽部』発行元の博文館と巖谷小波、さらに『京都日出新聞』記者との交流(瞳々会)などに直結する「集古会と巖谷小波」については、第二章aに譲るとして、この表紙の奈良絵扇の特徴を摘記しておく。二本ほどの縦横の柱組の家構えに赤衣の半身の人物を描き、紅緑の花葉を点じた上段、雲で仕切られた下段には同じく赤衣で横向きの二人が独特な頭髪で左右の手を挙げて「踊る」ごとき図案である。この図案は、現在も奈良の扇店で鬻がれているものと同じで、石川透氏「奈良絵本という言葉」(『奈良絵本・奈良絵巻研究』三号、二〇〇五年九月)がとりあげる仙台国分町に店を構えた奈良屋八兵衛の景品の奈良絵の団扇、清水泰氏の取り上げた奈良扇や奈良茶碗(奥田木白)の絵柄と同じである。奈良屋八兵衛の景品の奈良絵の団扇は江戸期のもの、と推定され、奈良茶碗も奥田木白の手にかかっているものには、江戸末期のものも伝えるものもあるようである。また、この図案の扇絵には、少なくとも江戸期に遡る

明治三十五年創刊情歌雑誌表紙(奈良市内)

三田平凡寺旧蔵「奈良扇、の図案化



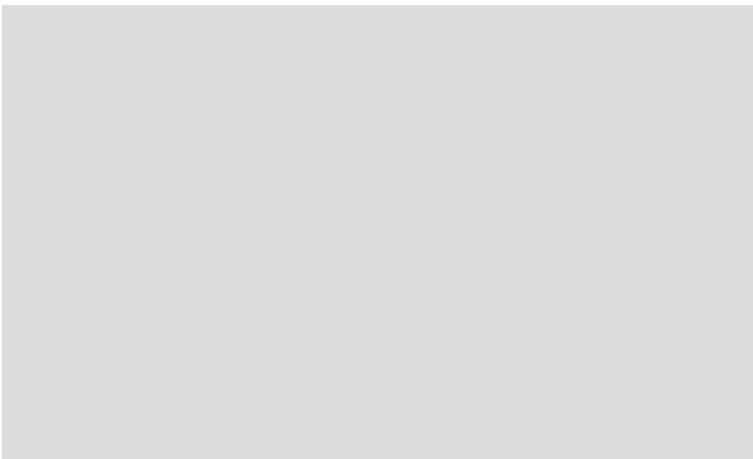
ものと思われる遺品もある。掲載の『奈良扇』は、「奈良市東木辻二十三番屋敷」の「京榊富三郎」を編輯兼発行者として、明治三十五年七月二十九日創刊された情歌雑誌である。表紙には印刷手彩色(?)の「奈良扇」を図案として配した。その「奈良扇」の絵は、いわゆる「奈良絵」として知られる「画柄」「画風」

に他ならない。家蔵の一点は、三田平凡寺旧蔵の一点であるが、同誌に「詞宗撰」とある「東亭扇升」は、後の劇作家・小山内薫の情歌作者としての号である。小山内の仲間としては、鶯亭金升を筆頭として、撰者のひとりとして上田の飯島花月などがある。情歌や狂詩・狂歌・川柳仲間には、集古会々員は多い。「中世文学・美術」の用語として定着してきた『奈良絵本』の具体的なイメージを決定付けた「奈良扇絵」は、明治二十九年創立の「集古会」の周辺に位置する『情歌雑誌』の表紙として、全国の情歌仲間のネットワークとしても機能した交換受贈雑誌として配送されていたと想像される。鶯亭金升などは第四回内国勸業博覧会開催中の明治二十八年五月、情歌の競吟大会のために京都へ赴いている。その際の記録一帖（西沢爽氏蔵）があり、その表紙には岡崎の模造大極殿の全景が配されて、博覧会を当て込んで全国大会が開催されたのであろうことは明らかである。明治三十五年七月二十九日創刊の『奈良扇』が奈良県を協賛県とした第五回内国勸業博覧会に関して意識していなかった、とは考え難い。明治三十六年の三月の第五回内国勸業博覧会の開催（於大阪市天王寺）に合わせた明治三十五年の四月と七月発刊の両雑誌表紙が同図柄・ほぼ同彩色の「奈良絵扇」で飾られたのは偶然であろうか。この問題については、後章に触れるとして、現在も店頭に並

ぶ奈良扇を掲出しておく。

現在の「古代」奈良扇

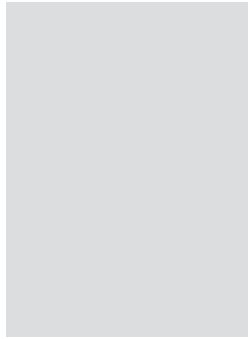
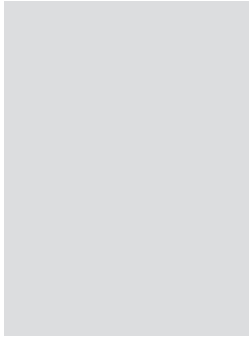
赤井達郎氏「奈良絵本について」紹介の奈良扇と基本構図同



大正・昭和に入る頃には、この手の構図・彩色の奈良絵扇風図案が「浪花」の地などにも転用される例もあり、いわば、「大津絵」などの一類として古雅な「下手絵」の系列に組み入れられる傾向が認められる。次に掲げるのは、大正十一年の大阪新町の演舞場の新築記念と銘打った「浪花踊」のパンフレットの表紙であるが、難波の地に適う構えとして住吉神社かと思われる社を配した構図になっている。この時期の「大

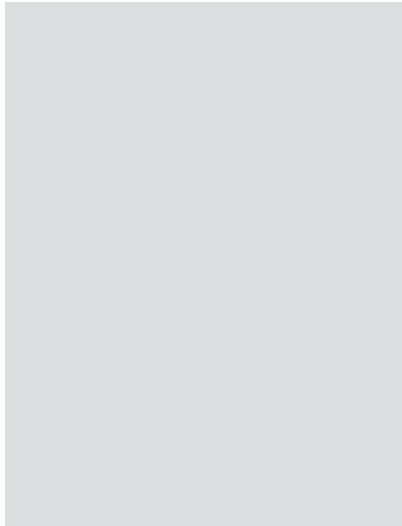
津絵」の「流行」が齎した筆觸・彩色などの傾向を同じくした羽子板絵・雑絵・絵馬といった諸国物産への関心の昂まり、その系列の下に組み込まれて以降の展開の相が窺われる。最も注目すべき点は「踊」のパンフレットに活用されたことである。古いわゆる「奈良扇」の

大正十一年、「浪花踊」パンフレット



この手の図柄には必ず魚籠と釣竿が描かれ、二人の人物は腰蓑をまとった漁師なのである（憶測するに桃源郷を描いたものか）。図の解釈が「踊」に完全に転じたことが確認できて興味深い。

昭和十年には、京都の月曜会が主催した書法及奈良絵本展が開催されるに至るが、横山重氏以前の旧蔵者には大阪保古会・京都月曜会（いずれも設立当初、東京の集古会に顕著な影響をうけている）などに所属した京阪の趣味家の多いことの指摘も既におえているので繰り返さない。近年の石川透氏の発掘した多くの「奈良絵本」類やその絵の製作者などの緻密な追及によって解明されたことのひとつで



あるが、奈良絵本の生産の地が京都を中心とした地域にはほぼ限定できるようである。生産地の京阪に残存する率が極めて高いことも肯かれるところで、「奈良絵本は早く散佚して諸家の秘庫だに存せるもの亦多からざるが如く、其収集の難きは帝国図書館に存せるもの、如き僅々数部に止まれるにても知り得可し」との

記述も東京の集古会誌掲載宮本摺衣の論文の一節であり、明治三、四十年代の関東周辺に流布することの稀なことが知られ興味深い。生産地・流通地域が江戸ではないことの裏づけとも考えられるのである。奈良絵本展観目録に掲載された月曜会の会員は次の通りである。

ちなみにこの月曜会や大阪の保古会の人々は明治三十六、七年頃から集古会に陸続として入会し、大正期には大方のメンバーが集古会の会員でもあった。(小山源治・杉浦丘園・田中緑紅・禿氏祐祥などである)。

二、第四・五回内国勸業博覧会と奈良の「名産としての扇へ」

a 京都『日出新聞』記者と博文館・巖谷小波

『文藝倶楽部』定期増刊「京都と奈良」八巻六号で知りうることを以下に摘記する。出版社は博文館で、表紙絵は歌川国松という錦絵師が担当し、扇面を図案化して上に京の扇面図(《内国勸業博覧会・第四回》の目玉である模造大極殿)、下に奈良の扇面図(いわゆる「奈良絵本」の命名の根拠として諸家が(この奈良扇に似ているところから)とする)を古雅な下手絵に仕立てて配したことが知られる。その目次を次に掲げる。

「 表紙

都の扇（精彩／石版画）…歌川國松筆

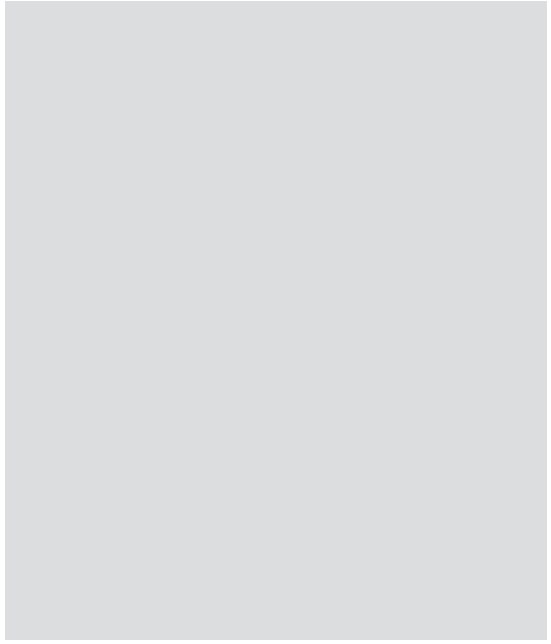
写真版

風景と美人（アートペーパー四頁）

京都奈良の風景と美人（十六頁）

次行以降は三段組みで、先ず上段から関連する項目を抜粋するならば、

「京都御苑…中川霞城、京都の山水…堀江松華、（以下略）」

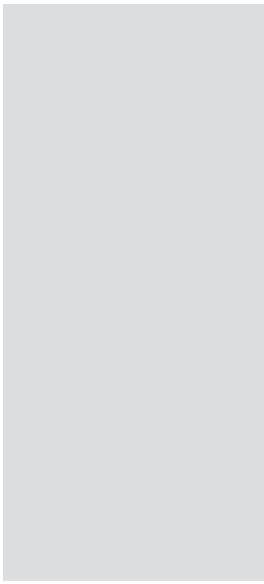


「瞳々会」会員と増刊号「京都と奈良」

中川霞城・堀江松華（既に退社）・久保田米僊・岡本橘仙・金子静枝・村上文芽などの名前が並び、中川に至っては、四明山人の名で更に四篇も担当している。彼らは、巖谷小波の日出新聞入社後にできた小波肝煎りの社内文藝サロン「瞳々（どうどう）会」の主要メンバー達である。

『文藝倶楽部』八巻五号掲載の定期増刊「京都と奈良」八巻六号の予告・目次をも併せて見ておく。

村上文芽は、染織方面に活躍、金子は高島屋「新衣装」にも寄稿、中川は四明とも号した四明山人である。日出記者には、染織・高島屋凶案工芸などの方面に北村鈴菜も居た



竹井明男氏「金子静枝と明治の京都」
（『京都新聞』）他参照

八巻五号の予告を拡大すると次のようになる。

ではない。

博文館発行の『文藝倶楽部』八巻五号定期増刊「京都と奈良」が集古会（京阪と緊密関係）幹事巖谷小波の係わること深い京都日出新聞の記者を中心として編集されていること、表紙の絵柄が団扇ではなく「扇」であることに着目しなければならぬ。また、「歌川国松氏の彩童に成る表紙」との記述には留意される。国松の「奈良絵扇」を配した表紙を評して「彩童に成る表紙」という点については詳らか

まず、歌川国松・巖谷小波と京都新聞の関係であるが、『浮世絵大事典』（国際浮世絵学会編）「歌川国松 うたがわくにまつ 安政二年（一八五五）〜昭和十九（一九四四）。一龍齋・一応齋と号する。豊重、福堂とも署す（中略）明治十二年（一八七九）、二五歳で小林永濯に入門、その頃「荒磯新聞」に挿絵：（中略）明治一七年、大阪の「此花新聞」に招聘され二年の間在阪して筆を揮う。帰京して「絵人朝野新聞」、「毎日新聞」「あけぼの新聞」などに挿絵（中略）明治二十二年、京都「日出新聞」に招かれ、明治三十六年まで京都で作画した。一時帰京するが、再び大阪へ行き、「浪華新聞」などに作画する一方本屋、絵葉書屋などを営んだ。」という。一方、明治二十五年には、杉浦重剛の推薦により、巖谷小波が、京都『日出新聞』の主筆となる。野崎左文の言うところによると、「其頃は俳優や芸人に限らず東京下りといふことが幅の利いた時代ゆゑ新聞記者にしてもその前年には種彦氏の高島藍泉氏が大阪に来て文壇を賑はせ（此時は既に帰京後）胡蝶園わかな氏は大阪朝日に在り、巖谷連山人も京都日の出新聞に筆を執って居られ、画家にも歌川國松、稲野年恒の二氏が来て居て」（『増補私の見た明治文壇』一 二〇〇七・二 平凡社 頁二二二）ということになる。明治二十七年十二月、日出新聞社を退

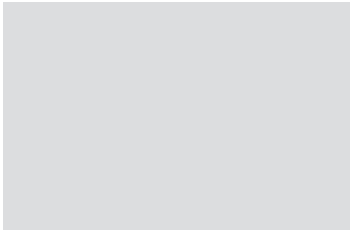
社。博文館の大橋新太郎の要請により、明治二八年主筆に迎えられた小波は、『少年世界』を創刊したが、小波の残した新機軸は、その後も日出新聞に引き継がれ、「巖谷小波の入社で、社内に「瞳々（どうどう）会」という文芸サロンが誕生した。これは、小波の退社後も続けられて、年一回の総会には、時には小波も東京からかけつけたほどであった。」（『京都新聞百年史』〈昭和五十四・十二 京都新聞社〉）という。小波の深く関与した大供会や木曜会に通うものである。小波の縁で泉鏡花「冠弥左衛門」は、日出新聞に連載されたが、当の小波も、「年に三回ぐらいの長編をのせ」「雑報や「散録」も書いた。」「退社後も、連載小説や、読切小説を随時送っている」（『京都新聞百年史』）。三宅青軒は、一八九七（明治三十）年九月から一九〇二（明治三十五）年十一月まで『文藝倶楽部』の編集者で、日出新聞に小説・雑文など寄稿（明治二十年代）している。巖谷小波は、さらに内国勸業博覧会開催の年の明治三十六年には、京・大阪に遊び、京阪の人士、とりわけ日出新聞の記者とは旧交を改めて温めている。

明治三十六・七年頃：武富瓦全宛（左）・水落露石宛（右）

武富は水落の近親・俳人



右は露石宛の小波來京歓迎会の案内状、発起人は中川霞城、岡本橋仙など日出新聞の記者連である。左は瓢亭における宴席での寄せ書きで武富瓦全宛のもの。次頁上段下は、その後大阪の南地で開かれた來阪歓迎会での寄せ書きである。上は同じ頃の花やしきで催された水鳥会での寄せ書きである。いずれも瓦全宛のもの。



水鳥会寄せ書き
(於：花やしき) ハガキ



巖谷小波来阪歓迎会寄せ書きハガキ

また、日出新聞の記者が中心になって明治三十六年末には尾崎紅葉の追悼会を金子静枝などとゆかり深い東山の西行庵（虎屋町小文、西行庵小文法師で知られる）で執り行っている。

下段左が紅葉山人追悼会（於西行庵）の案内状、参考までに右は紅葉葬儀案内状を掲出しておく。いづれも露石宛。

美術工芸家と商工業者で構成された京都美術協会の設立などで金子錦二とは旧知の久保田米僊が『文藝倶楽部』定期増刊「京都と奈良」に「京都の美術」を寄稿していることも看過しがたいものである。

以て東京文壇、とりわけ明治三十年代前後の硯友社や巖谷小波と京都日出新聞の記者連との交渉の極めて親密なことを知ることができよう。博文館発行の『文藝倶楽部』八巻五号定期増刊「京都と奈良」の編集が、博文館の巖谷小波に直結していた京都日出新聞の記者連との連関の中（瞳々会的なつながり）でいかに進められたか、想像するのは容易いことである。

b 日出新聞記者と美術工芸―扇

前節に表紙の絵柄が団扇ではなく「扇」であることに着目しなければならぬ、と注意を促したが、元来、奈良と結ぶ手工芸の物産品としては一刀彫、筆墨、その他に「団扇」を挙げることが「奈良案内記」の常である。第五回内国博覧会の「回覧記」を明治三十六年五月十三日付日出新聞に寄せた白面子も「三笠山の麓の利器」、「小鍛冶宗一とか菊一文字包永とか名乗って」出品した「仕込み杖」、そして「奈良人形」を探りあげ品評し、わずかに「奈良団扇」を「深草団扇と并んでの土産もので」と評し、大方はその安かろうの品質に比して随分高値だ、とこき下ろす始末で（「な

らのものとして」の流れか）、全く扇には触れるところがない。明治三十六、七年代の東京の「諸国物産」絵札交換会において、[△]奈良扇[△]が一刀彫の鹿と共に図案化（集古会と近い人々の図案）され奈良の特産とされていることを想起すると、両者の意識の乖離には解消しがたい不審が残る。

左：文藝倶楽部三十六年増刊『京都と奈良』関西旅行案内記事
中の「京扇・美也古扇」宣伝広告
中央：美也古扇（商標登録）
右：日出新聞三十六年五月十六日付：八面

ここで『文藝倶楽部』八巻五号「京都と奈良」の前号予告文中の「扇の地紙に京模様を畫き出して奈良扇を利かしたる意匠」とあること、目次に「表紙 都の扇」と題していることを考慮するならば、意匠構成上、京の都の扇が眼目で、奈良の古都の扇は添え物として「利」せたに過ぎない、ということにならうか。『文藝倶楽部』編集者、というより日出新聞記者・挿絵担当者にとって京都の扇、すなわち「みやこ扇（あえて言えば登録商標済みの美也古扇）」に「狙い」があり、そのみやこの扇図にひと工夫ひねりを加えた、「彩童」という言葉で括るならば、古雅・童画風に「利かせ」てみた、ということにならうか。『文藝倶楽部』八巻五号「京都と奈良」には京・奈良の名勝案内記事が大半を占め、紙面真ん中の囲みカットには、記事に関連する風物が巧みに描かれるが、表紙絵担当の「歌川国松氏の觀察に依」るものである。なかに記事に直結しない広告宣伝風の図柄が二点あり、ひととき目を引くのである。一点は「京都高島屋飯田呉服店」であり、一点は「美也古扇」である。

明治三十六年十一月十九日刊（宮脇新兵衛）

かくて京の美也古扇と第四・五回内国博覧会の關係に言及することになる。明治三十六年十一月刊行の宣伝パンフレット『美也古扇』（表紙は伊藤快彦）に拠ると次のような受賞歴を謳っている。

「廿八年平安遷都千百年紀念祭及び第四回内国勸業博覧会の挙行に当り美也古扇と号し巧緻精練なる数種の特製を出し之を以て商標となし亦た別号にも使用致し居候」六九頁
「第四回内国勸業博覧会にては各種皆精巧の審按を以て有効三等賞を受領致し候第五回内国勸業博覧会には二等賞を受領致し候 右第五回に於ては審査補助第七部勤務を命ぜられ全国の製扇を調査精窮する事を得たるは最も幸福とするところ」(七〇頁 第七部は、製作工業である)

「第五回内博京都受賞要覽」

第五回内国博覧会扇子出品は三府及び愛知県等にして(貿易品を除く)其内最も重なるは京都たり而して貳等賞を以て最優等唯一の受賞とす全国中其名譽ある受賞者は本店壹名ある而已なり左に表記せるは京都府受賞一覽にして参等賞を受けたるものさへ一名も無之蓋し本店は平素産額の多きと品質の佳良と意匠の巧み價の廉なるに因てなり」(七十二頁)

まさに国の勸業政策に率先精勵する姿が、受賞歴の披瀝に見て取れるのであるが、先立つて刊行した『賣扇庵扇面畫譜』(明治三十三・六)の後序ともいべき「扇面画譜発刊に就いて」で宮脇新兵衛は次のように述べている。

「近來社会の進展に伴ひ图案意匠の聲噴々として鳴り万般の用具を製する皆考案の良否を論するに在りて大に感ずる

所あり今般此扇面画譜を山田芸艸堂の主人に圖り發行せしめたるは敢て敝店か利を欲するの謂ならず之を参照して各種に就き更に趣向を凝らす時は他に良案の生するところもあるへしと思量し唯応用の途の汎からんことを庶幾するにあり」

「附記全国意匠博覧会に於て意匠一等金牌を受領せし美也古扇詳細目錄及び別段御詔向の扇子見積書等は御申越次第差上候」

デザインの新しさを追及する姿勢は一貫しており明治三十二年の「全国意匠博覧会に於て意匠一等金牌を受領」したことを敢えて附記する。久保田米僊の説いて止まなかつた内国勸業博覧会の意義を積極的に体现した商工業者のひとり宮脇賣扇庵であったのである。とりわけ明治二十八年第四回・明治三十六年第五回の内国博覧会での目覚ましい受賞歴は、次のような年表一覽を参考にするならば、明らかに日出新聞との接点が考えられる。参考として作成した年表一覽は日出新聞の明治三十年代の記者のうち、若手の北村鈴菜(直次郎)、創刊当初よりの金子静枝(錦二)という二人に絞つたものであるが、偶々入手した関連論文に基いたというにすぎない点をお断りしておく。(金は金子静枝、(北)は北村鈴菜を指す。

明治十八年四月京都『日出新聞』創刊、記者として招聘(金)

明治二十一年近畿地方古美術調査に日出新聞より派遣随
行、逐次同紙にルポ掲載（金）

明治二十三年京都美術協会は久保田米遷が設立に奔走、こ
の年設立、同協会の常置委員を委嘱される（金）

明治二十八年第四回内国勸業博覧会第二部審査品評人を命
じられる（金）。内勸博事務局出仕（北）

『京都名所圖會』（笹田栄寿堂 明治二十八・二）
序文（金）

同三十年京都漆工会漆器蒔絵図案会審査員を委嘱される
（金）。京都日出新聞入社（北）

同三十二年全国意匠工芸品博覧会高等審査員を委嘱される
（金）

同三十五年高島屋飯田呉服店発行『新衣裳』編集参加（北）
同三十六年第五回内国勸業博覧会の審査官を委嘱される（金）

同三十九年頃、京都日出新聞編集主任（北）
同四十年三越呉服店京都支店入社（北）

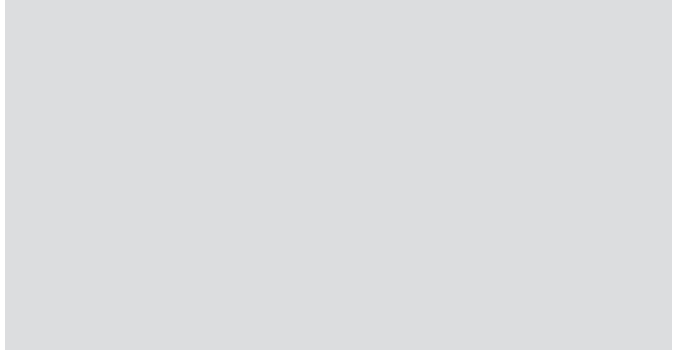
（山本真砂子氏「北村鈴菜と三越百貨店大阪支店美術部の
初期の活動」

竹居明男編『日出新聞』記者金子静枝と明治の京都』（芸
艸堂 二〇一三・一一）

福井純子「京都滑稽家列伝」（『国際言語文化研究所紀要』
九卷五・六号 一九九八・三）などに拠る）

明治三十二年に注目するならば、意匠一等金牌を美也古
扇が受賞したのは、全国意匠工芸品博覧会で、その高等審
査員を務めたのが他ならぬ金子錦二であった。参考として
掲載した図は、「左に表記」するとした「京都府受賞一覽」
である。その左頁には「扇唱歌」なるものが連ねられるが、
「金子静枝君作」なのである。一番から四十八番「扇の製
作多けれどにしの都の美也古扇／價はやすく品は良く一名
物とは成にけり」を以て結ぶ。日出新聞記者にして第五回
内国勸業博覧会審査官金子静枝と美也古扇との関係は、抜
き差しならぬものがあつたようである。

京都女子大学・短期大学図書館
第九回資料特別展観（二〇〇九・十一）



中川四明『京都新繁昌記』所載美也古扇広告：
中川四明は日出新聞記者（瞳々会常連）

この時期の日出新聞と美也古扇との関係について、明治三十五年七月三日付「賣扇庵の天井」なる記事にも注目すべきであることを京都女子大学・短期大学図書館第九回資料特別展観で知ったので、紹介しておく（次頁上段）。

日出新聞は、京都の美術工芸家・伝統工芸商工業者と直

結する博覧会の審査の現場に深く関わっていた。高島屋飯田の『新衣裳』には編集に参加した北村若菜のみならず、金子・中川・村上文芽なども寄稿するなど社を挙げての積極的な参画と考えてよいものがあつた。明治三十年代の日出新聞は社を挙げて美術工芸の意匠の革新へ深く係わっていた、といえよう。高島屋飯田と美也古扇、まさに明治三十五年の『文芸倶楽部』『京都と奈良』の囲みの広告宣伝カットに適う京都の美術商工業者といつてよいものであつた。表紙に「都の扇」の意匠を選択した背景に日出新聞の方針とその記者達の意図が働いていた、と考えて誤らないのである。

おそらく、「第五回に於ては審査補助第七部勤務を命ぜられ全国の製扇を調査精窮する事を得たる」宮脇賣扇庵の意図するところでもあつたか、と思われる。その際に「利かせ」役として奈良の扇が選ばれた可能性も考えねばならない、とも思うのである。宮脇新兵衛もまた、集古会の会員であつた。

三 奈良のガイドブックと水木要太郎

それでは、「利かせた」方の奈良の扇については、どのような状況にあったのか、見ておきたい。奈良の観光勸業関連の年表を一覧しておくことにする。

奈良県観光勸業年表

明治二、三十年代奈良県観光勸業年表

一八七六（明治九）奈良県、堺県に統合

一八八四（明治十七）フェノロサー岡倉天心、奈良古社寺

調査

天絵学舎（高橋由一の画学校）廃校

一八八七（明治二十）奈良県再設置

一八九〇（明治二十三）水木要太郎、奈良県尋常師範学校

教育心得として赴任

一八九一（明治二十四）和洋折衷ホテルの菊水ホテル、改

装開業

一八九四（明治二十七）帝国奈良博物館完成

一八九四（明治二十七）日清戦争

一八九五（明治二十八）県庁舎完成、第四回内国勸業博

覧会開催（入場者一一三万六千人）、（二府八県

〈奈良県入らず、と〉の認識について) 工藤泰子「第四回内国勸業博覧会と広域観光計画について」(『日本観光研究学会第二三回全国大会論文集』二〇〇八年十一月)

平安遷都千百年記念祭同時開催

四月『太陽』内国博記事、六月十八日『風俗画報』(特集京都大博覧会)刊、京都名所案内(ガイドブック)の出版点数増える。

水木要太郎、『大和名処ならのしるべ』(四月刊)、『奈良の名所』(五月刊)を著す

一八九八(明治三十一) 奈良名古屋間、鉄道開通

一八九九(明治三十二) 玉井大閑堂、集古会に入会

一九〇二(明治三十五) 四月『文藝倶楽部』「東京」、他に

「大阪と神戸」「伊勢と名古屋」

一九〇三(明治三十六) 第五回内国勸業博覧会開催(於四

天王寺)、奈良県は協賛県となる。

四月『大和巡』刊(同博覧会奈良県協賛会)

『美也古扇営業案内』第一版刊行

(芳井敬郎「第五回内国勸業博覧会における「陳列」の諸問題—博覧会事務局に対する奈良県の動向を中心としてI」(『國學院大學博物館学紀要』六号、一九八一年)

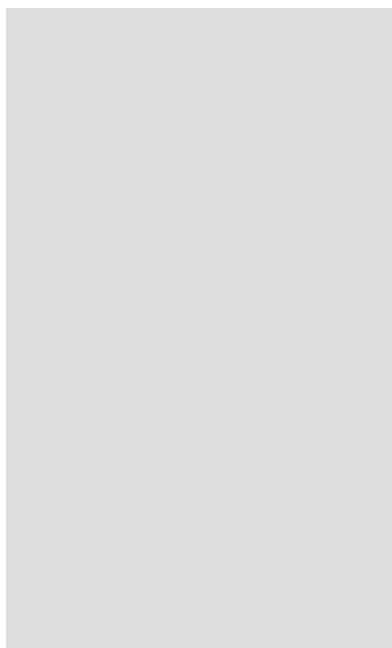
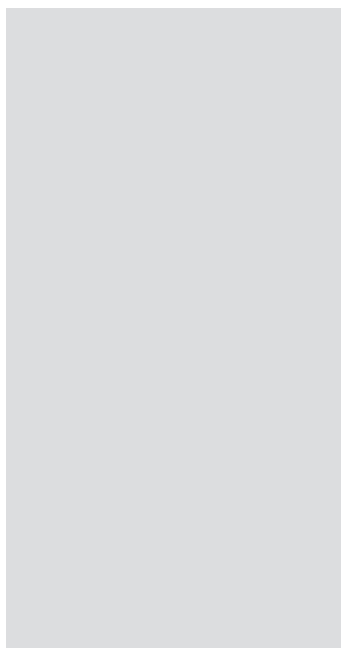
六月十日『風俗画報』臨時増刊二六八号、九月二十五日

同「函会」二〇/五号

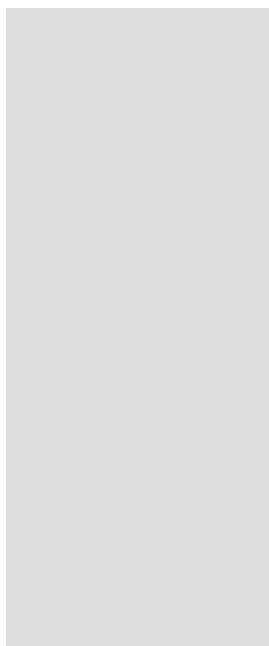
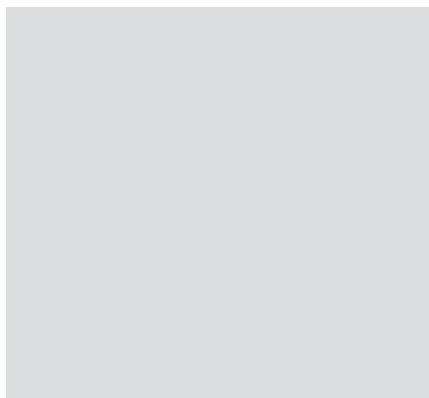
一九〇六(明治三十九) 平城宮跡保存会成る

繰り返すが、元来、奈良の手工芸の物産品としては一刀彫、その他に「団扇」を挙げることが「奈良案内記」の常である。代表的な一例を明治二十八年四月刊行『奈良の栞』(次頁・上段・右)に見ておくならば、若草山の「麓には鹿角細工奈良人形刀剣など当地の名産を鬻ぐ店軒をならべて頻に客をひけり」とばかりあり、「団扇」の記述をみない。まして「扇」の文字はない。明治二十八年の発刊ということを考えるに、京都岡崎にて開催された第四回内国博覧会目当ての観光客を当て込んだ案内記(パンフレット)である。明治三十六年にも第三刷が出ていて大阪の第五回内国博覧会に際しても流用されたようである。同じ著者不孤庵主人の手になる『奈良の名所』(次頁・上段・左)も明治二十八年五月に刊行されている。ほぼ同文であるが「この近辺には鹿の角細工、刀剣、筆墨、団扇、奈良人形、春日盆、根来塗、奈良漬、霰酒等を賣れる店軒をならべて頻に客をひけり」と改まり、「団扇」が挙がっている。

しかも、その団扇に「元直もと直にも奈良の物ものとて」の狂歌が
おまけに付されているのである（下段・右）。



『文藝倶楽部』八巻六号「京都と奈良」に付された「関
西旅行の葉」に歌川国松描くカット「奈良みやげ」を掲げる。
一刀彫に、奈良鹿の細工物で、一般的な奈良土産である。



明治三十六年の第五回内国博覧会を当て込んだガイドブック『大和巡』を見ると（次頁、上段図版参照）、墨を特産としてあげ、器物では赤膚焼きに及ぶが、「精巧なものを出すに至らず」とし、双行注記して「近頃郡山に木白といふもの父子二世技に巧みなり」と「奥田木白」には触れている。「奈良団扇」にもふれて前引の「元値にもならぬもの」とて」といふ歌を引きつつ、そのような「状態は昔の事となす」と説き及ぶ。その後「奈良扇また一種の名産にて」といささか唐突な形で扇をも挙げて「一種の名産」といふ言い回しに拘泥する必要はないのかもしれないが、唐突な印象は免れがたい。「元値もとねにもならぬもの」という「団扇」の評を既に「昔の事」として「奈良団扇」ならぬ「奈良扇」を「一種の名産」品に数える転換点にこのガイドブックの著者は立っていたのである。しかも「透彫など」の「精巧」についての評である。

第五回内国博覧会奈良県協賛会編纂にかかる『大和巡』は、明治三十六年四月に刊行されたが、著者は水木要太郎であった。水木要太郎と奈良については多くの参考文献があり、ここには触れることをしない。集古会との関係についてふれる久留島浩氏「水木要太郎と集古会」（『文人世界の光芒と古都奈良』〈二〇〇九・一〇 思文閣出版〉）より抄するならば、「明治四十一年（一九〇八）から、亡くな

る前年の昭和十二年（一九三七）まで、この集古会の会員だった。」、次の指摘は重要である。「奈良からは、要太郎と親しかった玉井九治郎（久次郎 初代玉井大閑堂）が、ただ一人明治三十二年（一八九九）から入会しており、あるいはその縁もあって要太郎も入会することになったのかもしれない」と。「要太郎が黒板勝美の誘いで明治四十五年に上京したときに紹介され、おそらく最初に会って大福帳に署名をもらったのが、集古会の発足に深く関わり、会を代表する一人であった清水晴風であった。」とも指摘している。

ここで明治二十年代奈良古跡古寺社調査に随行しルポを連載した日出新聞記者金子錦二のことが想起される。第四・五回内国博覧会と審査などで係わることの深い金子静枝でもあるが、前章前節 a・b で指摘した如く、集古会初期の有力会員であった巖谷小波の「瞳々会」の中心メンバーであり、京都の美術工芸商工業者と緊密な関係にあった記者のひとりでもあった。金子と水木には接点がなかったのであろうか、今後の調査を期したいところである。

集古会の諸氏にしても大阪の古書肆鹿田を介して知ることとはなかったか、など多くの可能性があったはずである。明治三十六年に鹿田松雲堂が集古会に入会している。鹿田松雲堂と書物購入で古くより縁の深かった水木である。大

阪保古会の創立期会員で集古会に入会する会員も少なくないことを考えると集古会の存在を既に明治三十年代の前半に知る機会があったのではないか、とも考えられる。

三十五年刊『文芸倶楽部』表紙の奈良扇絵の「筆触彩色」に重なる古雅・素朴な横型本であろう。この範囲に収まる絵本は、敢えて云うならば、明治三十五年以降のすなわち歌川国松描くところの奈良扇絵との「類似」から来る、奈良絵、風な絵入り写本である。そうした判断の基準は明治四十年代前後以降、東京を含めた趣味家・蔵書家とその周辺の学者の間に自ずと醸成された、共通理解^①であったようである。

宮本摺衣の指摘の通り「奈良絵本の名に就ては未だ其起源を知らずと雖も、蓋し其巻中の挿絵の画風によりて而か名付しものなるが如し。」

「画風は土佐絵…の優美鮮麗なる極彩色のものにして（但し随分粗末なるもの多し）金銀箔、金銀泥、緑青、群青、白群、丹朱、胡粉等の絵具を用ゐる頗る美麗を極む、……而して之を奈良絵と称せしは何故なりや詳ならず、奈良絵に就ては全く智識を有せざれど、今扇面などにかける奈良絵とは異なるもの、如し、」

とくに引用の最後に「今扇面などにかける奈良絵とは異なるもの、如し、」との指摘は重要である。もともと奈良絵本の呼称の最古の用例は、水谷不倒『明治大正古書価之研究』所載明治三十五年の条に「御伽草子 奈良絵本 土佐風の画 着色五十余入」・「文正草子 奈良絵大本 土佐

結び

近年、奈良絵本の点数は膨大なものとなりつつある（近時、平成二六・九・二〇～二三、石川透氏主催の「京都で作られた奈良絵本・絵巻」公開展示講演会があった）。そのうちの少なからぬ数量は、近世中期以降の正に明治

「画三十枚入」とある「奈良絵本」「奈良絵大本」である。いずれも「土佐風の画」「土佐画」である。明治三十五年の大阪、明治四十年の東京において期せずして「土佐絵（画）」「土佐風の画」を指して「奈良絵」とするのである。あるいは、明治の三十年代後半の一時期には、江戸初期に認められる豪華な縦型の大型奈良絵本などを指して使用されていた可能性も考えに入れておくべきかもしれないが、これ以上は全く手がかりもなく、皆目見当もつかない話である。

水谷不倒 『明治大正古書価之研究』が活用した主要資料類について肥田皓三氏は次のように述べている。

「昭和三十六年の秋、私の三十一歳の時である。『日本古書通信』の大阪の中央堂書店の出品目録に鹿田松雲堂の『書籍月報』と『古典聚目』合計百四十冊が載った。『書籍月報』は明治二十三年に第一号を出し、以後、古書籍の通信販売目録として続刊、明治四十二年『古典聚目』と改題、昭和十八年二月まで全部で百五十六冊に及ぶ、この業界で最も重んぜられる書目である。水谷不倒の名著『明治大正古書価之研究』（昭和八年刊）はこの鹿田目録を参照、引用することで完成した著述である。『古書通信』に出たのは、創刊第一号からの数冊を欠き、完全揃いではなかった

けれど、私は和本のことをもつと深く知りたく、どうしてもこれを手に入れたいと思ったのだが、なにぶん高価で、貧乏書生にとつてはたやすからざる事態である。でも、江戸時代にどのような書物がどれ位刊行されているのか、この目録の全冊に眼をとおしたら、その流れが手取り早く勉強できるのではと直感、かならず大きな教示をうけるにちがいないと確信して、無理をして入手したのである。』（四元弥寿著『なにわ古書肆 鹿田松雲堂五代のあゆみ』〈二〇二二・一一〉所収「鹿田松雲堂と私」）

この記述の中に答えは埋まっているはずであるが、もはや掘り起こして説き示すことのできる人は誰一人としていない。

明治三十年代の古書・骨董業界においても大型奈良絵本に、「ならのもの」の絵本^①が当て嵌まるものであろうか。聞き伝えもないのであろうか（京都で十七世紀製作と推定される絵本には、十分有効なものと考えられるが）。

ことの序に奈良絵本の生成の現場を知っていた一人かと推測される、明治三十六年集古会入会の水谷不倒の東京への転居通知の葉書をのせておく。以って往時を偲ぶこととしたい。水落露石宛てのものである。

本稿にとりあげた『月曜会』と集古会とのかかわりを端的に語るエピソードがある。『集古』（昭和十八年第二号）に集古発行責任者木村捨三が寄せた「晁杜翁を憶ふ」と題した小山源治（集古会々員）追悼の一篇に認められるものである。小山源治は、国文学史上、上田秋成に関する資料蒐集並びに秋成顕彰できこえた趣味家で（木越治氏「藤岡作太郎と上田秋成・序説」〔『上智大学国文学論集』二〇一・一・二〕）、森琴石との博物学を通じての交流でも知られる。

このような趣味家グループ間の交流とその豊饒な『実り』について、「研究史の交点―庭つづきの『学問領域』―」

と題して口頭発表（サントリー文化財団研究助成プロジェクト・第二回国際シンポジウム「東アジアにおける大衆的画像の視覚文化論」、平成二六・二・二七於同志社大学良心館三〇五室）を了え、近く活字化を予定している。主として大野麦風の「大正十五年の『活動』と大大阪・博覧会などの『動き』との関連にふれたものである。併せて参照頂ければ幸である。

（まきの かずお・実践女子大学教授）

* *

なお本稿は、平成二十六年度科学研究費（挑戦的萌芽研究・課題番号二四六五二〇四九）助成に拠る研究成果の一部である。

また、奈良のガイドブック関連資料について閲覧・書影掲載に御高配を賜りました奈良県立図書館情報館に感謝申し上げます。次第である。